

成果報告書

2025年 4月 14日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	研究助成		
研究および教育普及活動の期間	2024年 4月 ~ 2025年 3月		
フリガナ	トウキョウコウギョウダイガク ケンチクガクケイ ナスケンキュウシツ		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	東京工業大学 建築学系 那須研究室		
フリガナ	ナガヌマ トオル	職名	
代表者名	長沼徹	東京科学大学（旧東京工業大学） 環境・社会理工学院 建築学系 助教	
フリガナ	ニイクラ リカ	職名	
担当者名	新倉梨加	東京科学大学（旧東京工業大学） 環境・社会理工学院 建築学系 博士課程	
所在地	神奈川県横浜市緑区長津田町4 2 5 9 東京科学大学 J3-2008		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	生きた遺産としての日本の近代住宅の公開における居場所のナラティブ	
	【目的】	日本における近代住宅の居住を展示する試みとして実践している清家清「私の家」のハウスミュージアム活動において、当該住宅と居住様式や時代を共有する近代住宅における生活の中での居場所のあり方を比較するための資料整備を行う。また、国内において公開されている近代住宅に着目し、公開形式や解説といった生活の居場所のナラティブ（語り）を収集し、そのタイポロジーを抽出する。これをもとに、清家清「私の家」の公開活動にて、これまでのナラティブ（語り）を発展させる実験を行うとともに、近代の居住環境における居場所の多様なイメージを理解できる展示をパネルとリーフレットにより行うことを目的とする。	
	【実施体制】	東京工業大学建築学系那須研究室において、研究室を主催する那須および長沼、近代住宅における人間を中心とした居場所の形成を研究する博士後期課程学生の新倉を中心に、歴史的都市環境の保存活用をすすめる博士後期課程学生のCAI、さらに修士課程学生を交えた体制でおこなう。以上のメンバーは清家清の「私の家」のハウスミュージアム活動を主催するメンバーでもある。	
	【実施方法】	研究は調査、分析、展示の3段階で構成される。調査は1.国内の公開された近代住宅のリストの作成、2.現地調査および郵便による資料の収集、分析は3.生活の中心となる居間などにおける人の居場所に関するナラティブ（展示と解説）の収集、4.ナラティブの比較分類、5.ナラティブの類似性によるハウスミュージアムのイメージネットワークの図化、展示は、6.新しいツアープログラムの編成と試験的な公開の実施である。	
	【成果と社会的効果】	本研究の成果として、日本の近代住宅として現在公開されているハウスミュージアムのリストが整備され、その中で生活の中での人々の居場所がどのように語られているかを一覧できる資料が得られる。その結果を、現実の近代住宅の公開活動の中でみることにより、空間との対応でナラティブを理解することが可能であり、そこを訪れた人が他のハウスミュージアムを訪れることで、イメージのネットワークを自己の中に形成し、近代日本の居住文化を理解していくことにつながると考える。	
共同研究者等の有無	なし ・ あり (人数 14名) CAI Rongzhen (大学院博士後期課程3年)、松本勇生 (大学院修士課程2年)、鷲頭大祐 (大学院修士課程2年)、大澤菜緒 (大学院修士課程2年)、丸田紗羽 (大学院修士課程2年)、鈴木菜々花 (大学院修士課程2年)、小林凌輔 (大学院修士課程2年)、近藤卓海 (大学院修士課程2年)、西海天翔 (大学院修士課程1年)、牧野桃子 (大学院修士課程1年)、塩田紫乃 (大学院修士課程1年)、西岡洋亮 (大学院修士課程1年)、村上諒 (学士課程4年)、真鍋勇輝 (学士課程4年)		
助成金額	50万円	主な使途	調査旅費、図書購入費、印刷費

研究室名 学会・博物館名	東京工業大学 建築学系 那須研究室
テーマ	生きた遺産としての日本の近代住宅の公開における居場所のナラティブ

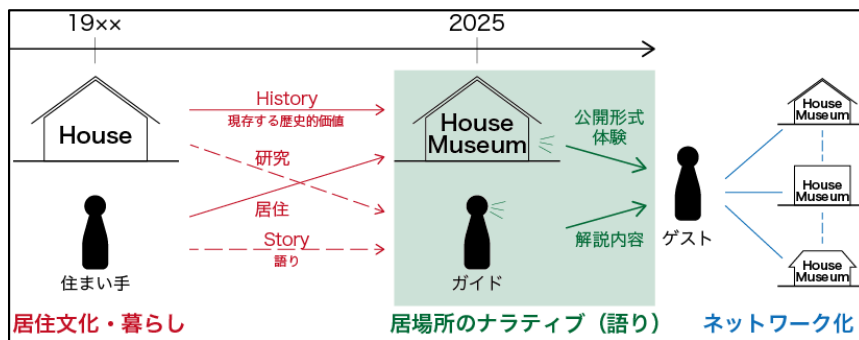
【目的】

建築形式に加え人々の生活様式においても大きな変化が起きた近代に試みられた住宅すなわち近代住宅は、新たな居住文化を提案しつつ時代と居住者の要求にこたえる居場所を提供し、暮らしとの強い結びつきのもとで展開された。その意味で、近代住宅を体験することは当時の人々の暮らしの在り方を生きて体験することだといえる。この考えのもと、私たちは以下を目標に掲げ、清家清「私の家」の公開に取り組んでいる。

1.ここに住んだ人と近い視点で住宅を理解してもらうこと

2.来訪者が他の近代住宅を訪問していくことで、住宅における居場所の在り方を自身の経験を通じてとらえていくこと

これらを達成するために、他の近代住宅の公開状況を参照しながら「私の家」の公開方法を日々検討しているところであるが、本計画では、近代住宅における生活の中での居場所のあり方を比較展示するための資料整備を行う。国内において公開されている近代住宅に着目し、公開形式や解説といった生活の「居場所のナラティブ（語り）」を収集し、そのタイポロジーを抽出する。これをもとに、清家清「私の家」の公開活動にて、これまでのナラティブ（語り）を発展させる実験を行うとともに、近代の居住環境における居場所の多様なイメージを理解できる展示をパネルとリーフレットにより行うことを目的とする。



本研究における居場所のナラティブの概念図

【実施体制】

東京科学大学建築学系那須研究室において、研究室を主催する那須および長沼、近代住宅における人間を中心とした居場所の形成を研究する博士後期課程学生の新倉を中心に、歴史的都市環境の保存活用をすすめる博士後期課程学生のCAI、さらに修士課程学生を交えた体制でおこなう。共同研究者らは清家清の「私の家」のハウスミュージアム活動を主催するメンバーでもある。

【実施方法】

研究は調査、分析、展示の3段階で構成される。**調査**は1.国内の公開された近代住宅のリストの作成、2.現地調査および郵便による資料の収集、**分析**は3.生活の中心となる居間などにおける人の居場所に関するナラティブ（展示と解説）の収集、4.ナラティブの比較分類、5.ナラティブの類似性によるハウスミュージアムのイメージネットワークの図化である。**展示**は、6.新しいツアープログラムの編成と試験的な公開の実施、である。

当初の計画では、展示の段階を「居場所のイメージネットワークの印刷物の作成と展示」としていたが、調査を経る中で、申請者らが携わる清家清「私の家」のツアーが相対化されていき、「生活の中の居場所のナラティブ」を人による解説とフィジカルな空間から成るものと捉えると「私の家」の性格にあった展示は、ガイドと実際の空間を工夫することで実現できるのではないかと着想した。

そこで調査の結果を展示手法へと還元し、ツアープログラムを再編成して試験的に実施することとした。これにより、生きた住宅としての居場所のナラティブの多義性を明らかにし、本研究成果の発展性を検討した。

この試験的な実施を経て、今後はボードやリーフレットなどのメディアを導入していくことを考えている。

研究室名 学会・博物館名	東京工業大学 建築学系 那須研究室
テーマ	生きた遺産としての日本の近代住宅の公開における居場所のナラティブ
【研究・教育普及活動の成果】	
本研究の成果として、まず、日本の近代住宅として現在公開されているハウスミュージアムのリストを整備し、公開形式の要素からこれを分類した(①)。加えて、一部の事例について、現地調査を実施し、公開におけるハウスミュージアムの語られ方を見学者の視点から記録、そこで得られる体験とガイドの語りの特徴を抽出し、ハウスミュージアムのタイポロジーを生成(②)、これを図面化することで、居場所のナラティブの特徴とその展示方法を事例ごとに示すことができた(③)。また、ハウスミュージアムとそれを取り巻く要素について、イメージネットワークを作成した(④)。 これを踏まえて、私たちが実践している清家清「私の家」の展示方法を省み、居場所のナラティブから遡及する形で新しいツアープログラムを考案しこれを実践した(⑤)。それぞれの具体的な成果を以下に示す。	
<u>①日本の近代住宅として現在公開されているハウスミュージアムの公開形式</u>	
DEMISTによるハウスミュージアムの9つの分類のうち、本研究の対象事例は、建築作品としての価値に焦点を当てた分類「House of Beauty」に該当する(※)。本研究では、ハウスミュージアムを、歴史的な価値のある建築的遺産であり、生活の在り方を伝える遺産としてとらえ、国内25件のハウスミュージアムを整理し、公開形式として情報をまとめた。表からは、所有者と運営の違いや公開の頻度、それに伴って見学形式が大きく4種類見られる。その中で「私の家」の活動は、有志団体と教育機関が連携して公開活動を実践しており、研究と公開活動が結びついた運営形式が実践されている。(自由書式p.1) ※) https://demhist.mini.icom.museum/publications/categorisation-projects/#	
<u>②ハウスミュージアムのタイポロジー</u>	
国内のハウスミュージアム9件を実際に訪れ、ツアーやディスプレイ、レイアウト等における展示の工夫を調査した。調査では、ツアーガイドの有無、展示パネルの有無、触る・座る動作の制限、当時の家具配置の維持といった体験のタイプに加えて、ガイドの解説内容を居場所のナラティブ、建築物の価値、住宅の歴史といった要素に分類して記録した。こうしたハウスミュージアムが表現・伝達する事柄の違いを、体験のタイプと解説内容から分類し、ハウスミュージアムのタイポロジーを生成した。(自由書式p.2)	
<u>③ハウスミュージアムにおける建築作品と住環境双方の価値を表現する展示方法</u>	
調査時の体験に基づいて、展示の内容から得た住生活イメージを居場所のナラティブとして図示した。(自由書式 p.3-8)	
<u>④ハウスミュージアムのイメージネットワークの図化</u>	
各ハウスミュージアムのタイポロジーと展示方法を踏まえて、イメージネットワークを作成した。このネットワーク図では、公開される近代住宅(建築)を中心に、当時の住まいと暮らしが私的な住宅として継承されつつ、一方でハウスミュージアムとして公開されることにより、関係主体が複合的に結びつくことが示せた。さらに、見学者を通してハウスミュージアムどうしが近代の居場所として結びついていくことが考えられる。そのため、個人が複数のハウスミュージアムにおける体験を継続的に築いていくための基礎資料となった。(自由書式p.8)	
<u>⑤少人数で催行する生活の体験に起点を置いた新しいツアープログラム</u>	
資料調査と現地調査に基づき、「私の家」のハウスミュージアムとしての特徴を「生きられた家」であることに見出した。これを来訪者に体験してもらうために、「私の家」の当時の居住人数程度の少人数で催行する新しいツアーを試験的に行った。人数を減らしたことで、より生活者に近い体験を実現でき、有効な展示方法であることを確認した。一方で運営上の課題も明らかになったため、今後のプログラムの改善に役立てる。(自由書式p.9-10)	

研究室名 学会・博物館名	東京工業大学 建築学系 那須研究室
テーマ	生きた遺産としての日本の近代住宅の公開における居場所のナラティブ

【今後の成果の活用と活動の展開について】

本研究では、日本の近代住宅として現在公開されているハウスミュージアムのタイポロジーとネットワーク、「私の家」の新たな公開プログラムが成果として得られた。これらの成果の今後の活用について、以下の内容を検討している。

1. 生活の中の居場所を体験を通じて理解してもらうための「私の家」の公開方法のアップデート

本研究では、住宅の居住者の人数に近い規模でツアーをすることで、特に室内において、ゲストがそこに暮らすように住宅を体験できることを確認した。ゲストの動線やガイドの割り振りなど、明らかになった運営上の課題の解消しつつ、ガイドの発話内容やゲストが座るレイアウトなどを工夫することで、より豊かな体験を提供することを目指す。また、住宅の周辺や近隣の住宅遺産の散策など、住人の日常生活エリアを追体験できるプログラムを組むことで、ゲストの地域の住生活に対する理解を深める方法を検討する。

2. リーフレットや展示パネルの作成

今回はより没入的な体験を重視するために、ツアーを再編成することで「居場所のナラティブ」を展示した。今後は、当初計画していたリーフレットやパネルによる展示を行う予定である。住環境と対応した解説であるガイドの発話を補完しつつ、居住環境の体験を維持した解説のレイアウトについて検討する。「私の家」での展示においては、来訪者にアンケートを実施し、イメージネットワークの可能性についても意見を集めることをめざしている。

3. 海外のハウスミュージアムを加えたハウスミュージアムのタイポロジーの整理

今回は国内の事例調査の対象としたが、海外にもハウスミュージアムは多く存在する。異なる気候や文化のもとで、住宅における生活の中の居場所はどのようなものであるか、またそれらがいかに語られているかを整理し、今回調査した国内の事例と対照することで、ハウスミュージアムのタイポロジーが整理される。

4. 国内外のハウスミュージアム間のネットワークの構築と活用

整理したタイポロジーを踏まえ、国内外のハウスミュージアム間のネットワークを構築する。これは各ハウスミュージアムの性質を一覧できる資料となると同時に、来訪者がハウスミュージアムにおいて生活や居場所にまつわる体験を重ねていくうえでの補助線になると考える。

5. 継続的な研究活動の実践と国外への発信

ハウスミュージアムに関してはDEMISTが体系的に整理しているが、ここでは住宅の暮らす場所としての側面は等閑されている。よって、本研究が「居場所のナラティブ」という観点から整理したタイポロジーは、ハウスミュージアムの在り方に新たな視座をもたらすものであり、国外に向けて我々の活動を発信することで、居住文化の発信の場としてのハウスミュージアムの発展に寄与する。